

イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第9回)

パブリックスクール

「パブリック」と言っても、日本で言うところのエリート私立高校（中学校課程を含む）ということになるのか。いわゆる私立学校（Independent School）のうちの伝統校のことである。なぜ、パブリックなのか、という話には諸説あるが、昔は教育は専ら貴族の館の室内で「おぼっちゃま」に対してプライベートに行われるものだったのに対し、貴族以外にも「良家」が増えておぼっちゃまの数も増えたので、教育の場（School）を設けてパブリックにしたからそう呼ばれるようになった、という説には頷ける。

20年ほど前、日本の某私立高校の教師をしている友人が、兄弟校の提携をしているイギリスのイートン校（Eton College）に日本語・日本文化を教えるために派遣された。これはパブリックスクールの中を覗く絶好のチャンス、と思い旅行の途中で約束を取り付け、勤務中の彼を訪ねていった。イートン校はロンドンの西、鉄道で1時間ほど行ったウィンザーの街にある。休み時間になり、映像でよく見るような黒いガウンに身を包んだ友人が校舎から出てきたところで、ひとしきり立ち話をしていると、やはりガウン姿の生徒たちが通り

過ぎる際に彼に挨拶をしていく——「ハイ、サー」「ハイ、サー」。「ハイ」（Hi）にも「サー」（Sir）をつけるあたり、さすがに伝統校だ。一瞬、沖縄の挨拶かと錯覚したが…

ふと見ると、何やらものものしく警官が立っている。「何かあったの？」と友人に聞くと、「ああ、あそこの教室に今、ウィリアムがいるんだよ」とのこと。なるほど。今では二児の父親になっているウィリアム王子のことだ。当時14歳、まだダイアナ妃が生きていた頃の多感な年頃の話である。

帰国後、貴重な体験をさせてくれた友人に礼状を出そうと思って気がついた。そういえば、彼の家までの道順と学校への行き方は詳しく聞いていたのに、住所と郵便番号は聞いていなかった（まだ、ネットでやり取りする以前のことである）。「ウィンザーの街のハイストリートにある郵便局の裏手に建つ旧司祭館（Old Vicarage）と呼ばれる建物」という道順をそのまま葉書に英語で書いて、末尾にUKと付記して投函した。数日後、友人から「届いたよ」と返事があった。とかく遅配で評判の悪かった英国郵政公社Royal Mailもやるときはやるもんだ。今では民営化されたが。